

## 検索時の構えが自伝的記憶の想起に及ぼす影響\*

北村 瑞穂\*\*

## The Effect of Retrieval Set on Autobiographical Memory Recall

Mizuho Kitamura

本研究では、自己高揚や、失敗を繰り返さないという教訓を目的として、自伝的記憶を想起させた場合、Ross & Wilson (2002) と同様に、現在に近いエピソードはポジティブな感情が生起し、現在から遠いエピソードはネガティブな感情が生起するか検討した。教示によってエピソードの検索時の構えを操作し、これまでの人生から3条件（印象条件、自己高揚条件、教訓条件）のエピソードの想起を求めた。一週間後に、再度同じエピソードの想起を求め、再想起されたエピソードと忘却されたエピソードの感情のタイプと強さを比較した。さらにエピソードが生じた時期の、現在からの客観的遠さと主観的遠さの違いを捉えることを試みた。結果から、自己高揚的及び教訓的エピソードを意図的に想起させた場合、現在から遠いほどネガティブエピソードが想起されるという結果は示されなかった。したがって、自己高揚や教訓のために、意図的に過去のネガティブエピソードを想起するという方略は取られないことが明らかになった。

**Key words:** autobiographical memory, retrieval set, emotional value, affection types, affection intensity

過去に起こったエピソードや、経験に関わる自己の記憶を自伝的記憶 (autobiographical memory) という。Conway (1991) は自伝的記憶の特徴として、自己に深く関わっていること、エピソードに関しての個人的な解釈があること、必ずしも正確な記憶ではないこと、イメージの存在などを挙げ、Tulving (1972) の述べるエピソード記憶と区別している。これらの自伝的記憶は、我々の中でどのように構成され保持されているのだろうか。過去のエピソードの想起と最近のエピソードの想起には、どのような違いがあるのだろうか。また、これらのエピソードの想起はどのような感情を伴っているのだろうか。

自伝的記憶の時間的経過と仕組みについて Brewer (1986) は、コピー理論と再構成理論と部分的再構成理論の3つを検討している。1つめのコピー理論とは、自伝的記憶は過去のエピソードの正確な再現であるとする説であり、重大事件などを細部まで鮮明に覚えているフラッシュバルブ

記憶などがこれにあたる。2つめの再構成理論とは、自伝的記憶は過去のエピソードを再構成して作り上げたものであるという説であり、コピー理論とは反対の立場にある理論である。そして3つめの部分的再構成理論は、上述の両方の理論を部分的に支持する理論である。つまり最近の記憶は情報をそのままの形で保持するが、時間経過とともにそれらは変容し再構成されるとする理論である。Brewer (1986) 自身は、この部分的再構成理論の立場を支持している。このように過去の経験は、最近の記憶は比較的正確だが、時間経過とともにスキーマに基づく過程の影響を受けて再構成され、変容した形で保持されると考えられている。

さらに自伝的記憶の時間的経過と、エピソードの想起に伴う感情に関する検討もなされている。例えば神谷 (1997) は、想起するエピソードの期間の幅によって、エピソードに伴う感情が異なることを確認している。神谷 (1997) は、これまでの人生と最近一ヶ月で、それぞれ印象的なエピソードの想起を3つまで求め、そのエピソードに関する感情の記述を求めた。その結果、一ヶ月条件よ

\* 本論文の一部は日本心理学会第71回大会において発表された。

\*\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

り人生条件において、不快エピソードが多いことが確認された。さらに一ヶ月後にエピソードの再想起を求めた時、一ヶ月条件では快エピソードと不快エピソードの再想起率に差は認められなかったが、人生条件では快エピソードに比べ不快エピソードが再想起されやすいことが明らかにされた。この結果は、エピソードの想起を、これまでの人生で印象に残ったものとした場合に、個人にとって重要な不快エピソードが想起されやすくなる可能性を示している。また Ross & Wilson (2002) は、実験参加者に、高校最終学年時の社会的成功の程度と、その頃が現在の自己にどの程度時間的に近いと感じるかの評定を求めた。その結果、社会的に成功している高校時代の自分を現在に近く感じ、社会的に成功していない高校時代の自分は遠い昔に感じる事が明らかにされた。これは一ヶ月条件より人生条件において、不快エピソードが想起されやすいという神谷 (1997) の結果と類似している部分がある。これらの研究から、現在に近いエピソードはポジティブな感情が生起し、現在から遠いエピソードはネガティブな感情が生起する可能性が示唆された。それでは、なぜ自伝的記憶にはこのような感情が伴うのであろうか。また想起するエピソードの古さによって、なぜ伴う感情が異なるのだろうか。

自伝的記憶を想起した時に生じる感情の役割については諸説ある。Pillemer (2003) は、自伝的記憶には、社会的機能（対人関係、コミュニケーション）、自己定義（個人内、精神活動）、方向づけ（問題解決）という3つの機能があることを指摘している。また Bluck (2003) は自伝的記憶に伴う感情が、現在の自己を方向づけたり、気分を調整したりする機能が存在すると述べている。例えば自尊心の高い者は、ネガティブ気分時にポジティブエピソードを想起することによって、気分を回復することが知られている (Smith & Petty, 1995)。そして榊 (2005) は、重要度の高いポジティブ気分を想起するほど、想起前より想起後の気分がポジティブに変化することが明らかにした。したがって、上述した神谷 (1997) や Ross & Wilson (2002) の研究結果のように、現在に近いエピソードはポジティブ、現在から遠いエピソードはネガティブになるのは、Pillemer (2003) や Bluck (2003) が述べるような感情の役割が関係している可能性が考えられる。

Ross & Wilson (2002) の研究結果を生じさせる感情の役割は、2つ予想される。1つは自己高揚を促す役割である (Ross & Wilson, 2002)。これは過去の自分を現在の自分より悪く評価することによって、現在の自分をより良く評価することを促すといった役割である。Ross & Wilson (2002) のこの解釈によれば人は過去の不快エピソードを想起することで、現在の自分をより良いものと見なしているのかもしれない。

もう1つ考えられるのは教訓的役割である。過去のネガティブな失敗経験は、自分を成功に導き、失敗を繰り返さないという機能をもつ (Bluck, 2003)。例えば Pillemer (2003) は、Herman (1992) のトラウマからの回復を論じた研究をもとに、ネガティブエピソードは将来の安全を確保するために避けなければならない、もしくは向き合わなければならない危険を示唆する鮮明な記憶であると述べている。このように、人は過去のネガティブエピソードを繰り返し思い出すことで、失敗を繰り返さないように努めている可能性がある。しかしながら以上の感情の役割の解釈は実証的データに乏しく、このような自己高揚や教訓的役割が、Ross & Wilson (2002) の結果のような、感情的エピソードの想起を促しているという確証はこれまで得られていない。

そこで本研究では、自伝的記憶を自己高揚や教訓を目的として、直接的に想起させた場合、Ross & Wilson (2002) のように、現在に近いエピソードはポジティブな感情が生起し、現在から遠いエピソードはネガティブな感情が生起するかを検討した。教示で想起を操作することによって、自伝的記憶の役割（自己高揚、教訓）とその特徴について検討した。これまでの人生から3条件（印象条件、自己高揚条件、教訓条件）のエピソードの想起を求め、一週間後に再想起されたエピソードと忘却されたエピソードの感情のタイプと強さを比較した。さらにエピソードが生じた時期の客観的遠さと主観的遠さの違いを捉えることを試みた。

結果の予測は以下の通りである。1つめの印象条件は、神谷 (1997) と同様の結果が予想される。すなわち印象的なネガティブエピソードは再想起されやすく、現在から遠いエピソードほどこの傾向が強まるはずである。したがって、再想起されたエピソードは、ネガティブ感情が強いものほ

ど現在から遠いと感じる。2つめの自己高揚条件は、Ross & Wilson (2002) にしたがえば、再想起されたエピソードはポジティブ感情が強いものほど現在により近いと感じ、ネガティブ感情が強いものほど現在から遠いと主観的に感じる。3つめの教訓条件については、Bluck (2003) は、過去のネガティブな失敗経験は自分を成功に導き、失敗を繰り返さない機能をもつと述べている。また神谷 (1997) は、ネガティブエピソードは再想起されやすく、一ヶ月条件ではなく人生条件においてこの傾向があると述べている。これらの先行研究の結果から、教訓条件では教訓となるべきエピソードを現在からより遠く、よりネガティブに感じる事が予想される。

## 方 法

**実験計画** 想起時の構え(印象条件, 自己高揚条件, 教訓条件)と再想起の成否(再想起, 忘却)の3×2の2要因計画であった。第1要因が参加者間要因、第2要因が参加者内要因であった。

**実験参加者** 女子短大学生45名と女子大学生55名の計100名であり、平均年齢は19.52歳であった。

**記録用紙** エピソードの記録用紙は、検索時の構えを操作するため印象条件、自己高揚条件、教訓条件の3種類が用意された。それぞれの条件で表紙タイトルと調査の説明文を以下のように作成した。1つめの印象条件のタイトルは「印象的な思い出調査」であり、説明文は「人それぞれ過去に経験した出来事は異なっています。あなたのこれまでの人生に起こった印象的な出来事を思い出してみして下さい。そして印象に残っているエピソードを、これまでの人生から5つ以上思い出して下さい。」であった。2つめの自己高揚条件のタイトルは、「過去の思い出でつくる幸せ調査」であり、説明文は「今の自分が幸せであるかどうかは、過去にどのような経験をし、どのような思い出を持っているかによって変わると言われています。人それぞれ過去に経験した出来事は異なっています。あなたのこれまで人生を振り返って、自分の現在の幸せにつなげて下さい。そして今の自分が幸せだと思うのに関係しているエピソードを、これまでの人生から5つ以上思い出して下さい。」であった。教訓条件のタイトルは「過去から学ぶ生き方調査」であり、説明文は「あなたは、この先どんな

な人生を望んでいますか？これから先のあなたの生き方を考えるときに、あなたのこれまで培ってきた経験が重要になってきます。人それぞれ過去に経験した出来事は異なっています。あなたのこれからの生き方を考えるために過去にあった出来事を思い出してみして下さい。そして自分がこれからどう生きるかという、ヒントや知恵になるようなエピソードを、これまでの人生から5つ以上思い出して下さい。」であった。

これらの記録用紙にはエピソードが起こった場所(どこ)、内容(何が起こった)の記述を求める欄があった。本研究ではこの2つを再想起できたかどうかを判断の指標とし、1回目の想起と再想起でこれらが一致した場合に再想起できたと判断した。また各エピソードについて9つの感情(うれしい、楽しい、誇り、驚いた、恥ずかしい、悲しい、恐怖、嫌悪、怒り)の感情強度を10段階評定(全くない:0、非常に強い9)で求めた。さらに、何年前のエピソードか(客観的遠さ)、どれくらい昔に感じるか(主観的遠さ)の評定も10段階評定(最近:0、遠い昔:9)で求めた。

**手続き** 手続きは1回目の想起と2回目の再想起の2回に分けて実施された。2回の想起の間には一週間の期間をおき、2回目の再想起時に1回目に想起されたエピソードの再想起を求めた。

**1回目の想起** 短大生45名と大学生55名の2つの集団に分けて実施された。実験参加者には、3種のタイトルのエピソード記録用紙がランダムに配布され、エピソードの想起が求められた。なおエピソード記録用紙の中身は、記録した本人以外は見ないことをあらかじめ実験参加者に伝え、プライベートな内容も記載が可能であることを断っておいた。またエピソードの内容は重複しないよう求めた。さらにエピソードが起こった場所(どこ)とエピソードの内容(何が起こった)の記載、エピソードを思い出した時の9つの感情(うれしい、楽しい、誇り、驚いた、恥ずかしい、悲しい、恐怖、嫌悪、怒り)の感情強度の評定を10段階評定(全くない:0、非常に強い9)で求めた。さらにエピソードの客観的遠さ(何年前のエピソードか)と主観的遠さ(どれくらい昔に感じるか)を10段階評定(最近:0、遠い昔9)で記入させた。記載完了後、文字が書いてある面を内側にして記録用紙を折り、ホッチキスで周囲を数ヶ所留めるよ

Table1 再想起したエピソードと忘却したエピソードの平均評定値

検索時の構え		再想起/忘却 ( ) 年前	主観的遠さ	うれしい	楽しい	誇り	驚いた	恥ずかしい	悲しい	恐怖	嫌悪	怒り
印象条件	再想起	4.72 (2.89)	4.70 (1.84)	4.47 (1.92)	4.33 (1.87)	4.02 (1.88)	5.23 (1.71)	2.29 (1.97)	3.51 (2.29)	3.06 (2.07)	2.25 (2.02)	2.15 (2.01)
	忘 却	3.76 (2.27)	4.15 (2.40)	4.16 (3.24)	4.34 (3.27)	3.39 (2.69)	4.77 (2.66)	1.81 (2.50)	3.11 (2.74)	2.53 (2.87)	2.41 (2.56)	1.92 (2.33)
自己高揚	再想起	3.50 (2.36)	4.30 (1.83)	5.98 (1.89)	5.55 (2.06)	5.46 (2.26)	5.10 (1.77)	2.86 (2.78)	2.51 (1.75)	1.51 (1.51)	1.27 (1.42)	1.29 (1.24)
	忘 却	3.80 (3.34)	5.20 (2.33)	5.79 (2.48)	5.67 (2.75)	5.48 (2.58)	5.11 (2.20)	2.98 (2.64)	2.58 (2.64)	2.48 (2.73)	1.51 (1.83)	1.32 (1.59)
教訓条件	再想起	4.66 (2.11)	4.45 (1.69)	4.88 (1.82)	4.25 (1.77)	4.36 (1.92)	5.18 (2.20)	2.36 (2.00)	3.05 (1.66)	2.49 (1.84)	2.13 (1.62)	1.83 (1.40)
	忘 却	2.70 (2.41)	3.60 (2.24)	4.81 (3.01)	4.50 (2.87)	3.92 (2.70)	4.77 (2.69)	2.36 (1.94)	2.90 (2.56)	1.98 (2.28)	2.23 (2.51)	1.42 (1.70)

( ) 内はSD

う実験参加者に求めた。この記録用紙は実験者が回収せず参加者が持ち帰って保管し、一週間後の再想起時に持参するよう求めた。この時、一週間後に再想起を求めることは、実験参加者に予告しなかった。これらの手続きに要した時間は、20分程度であった。

**2回目の再想起** 一回目の想起から一週間後に、1回目の想起時に想起したエピソードの記載と感情強度の評定を求めた。教示は「先週記述した、これまでの人生から思い出したエピソードの内容を、思い出せるだけ記載して下さい。順序はバラバラで結構です。」であった。この時のエピソード再想起用紙では、1回目の想起と同様にエピソードが起こった場所、内容の記述を求めた。また各エピソードについて9つの感情の感情強度を求めた。さらにエピソードの客観的遠さと主観的遠さの評定も求めた。再想起終了後、参加者自身が1回目のエピソード記録用紙のホッチキスで閉じた部分を開き、起こった場所と内容の部分の記述が、再想起用紙のエピソードと一致しているかどうかを確認した。そして実験参加者が、一回目の想起と再想起のエピソードが、ほぼ内容が一致したと判断した場合に再想起ができたと思なした。最後に、初回想起と再想起のエピソードの感情価の評定値、および再想起が成功したかどうか、エピソードの主観的遠さと客観的遠さを、実験参加者自身に提出用の集計結果提出シートに書き写させ提出を求めた。教示は「1回目の想起エピソードの評定値をシートの左半分に全て記入して下さい。そして2回目の想起ができたエピソードの評定値を1回目の想起エピソードの評定値の右隣に列を揃えてお書き下さい。2回目に想起できなかったエピソードの評定値は記入しなくて結構です。」であった。なお、これらのエピソード内容の提出は求めなかった。再想起の手続きに要した時間は30分

程度であった。

## 結果と考察

1回目の想起時に想起したエピソードを2回目の再想起時に全て想起したり、反対に全く再想起できなかったりした21名を除いた、印象条件29名、自己高揚条件23名、教訓条件27名の計79名のデータを分析の対象とした。

想起されたエピソードと忘却されたエピソードの感情の強さについて分析を行った。印象条件、自己高揚条件、教訓条件の3条件において、再想起されたエピソードと忘却されたエピソードの客観的遠さ(何年前)と主観的遠さと感情の強さの平均評定値を算出したのがTable 1である。

なお再想起されたエピソードの感情の強さは、2回目の想起時の評定値から算出した。忘却されたエピソードの感情の強さは、2回目の想起時に想起できず、この時の感情の評定値がないため、1回目の想起時の評定値から算出した。

感情の強さの評定値について、想起時の構え(印象条件、自己高揚条件、教訓条件)と再想起の成否(再想起、忘却)と感情(うれしい、楽しい、誇り、驚いた、恥ずかしい、悲しい、恐怖、嫌悪、怒り)を要因とする3要因分散分析を行なったところ、感情の主効果が有意であった( $F(8,608) = 55.76, p < .01$ )。さらに想起時の構えと感情の交互作用が有意であった( $F(16,608) = 3.21, p < .01$ )。感情の単純主効果を求めたところ、印象条件における感情の単純主効果が有意であった( $F(8,608) = 11.38, p < .01$ )。自己高揚条件における感情の単純主効果が有意であった( $F(8,608) = 34.98, p < .01$ )。教訓条件における感情の単純主効果が有意であった( $F(8,608) = 15.82, p < .01$ )。LSD法による多重比較を行ったところ、印象条件と自己高揚条件と教



訓条件で、うれしい、楽しい、誇り、驚いたの感情の強さが、恥ずかしい、悲しい、恐怖、嫌悪、怒りの感情の強さより強いことが明らかにされた。つまり印象条件、自己高揚条件、教訓条件のいずれにおいても、うれしい、楽しい、誇り、驚いたといったポジティブ感情が、恥ずかしい、悲しい、恐怖、嫌悪、怒りといったネガティブ感情より高いことが示された。したがって、本研究の結果は、印象条件におけるネガティブ感情の優位性を示さず、神谷 (1997) を支持しなかった。本研究の印象条件でネガティブ感情の優位性が示されなかったのは、本研究では印象の弱いエピソードも含めて想起させてしまったからかもしれない。なぜなら神谷 (1997) がエピソードを3つ想起させているのに対し、本研究では5つのエピソードを想起させたからである。そのため印象が弱いエピソードが含まれてしまい、神谷 (1997) と異なる結果が生じた可能性がある。

次に想起の構えの単純主効果を求めたところ、うれしいにおける想起の構えの単純主効果が有意であった ( $F(2,76) = 5.46, p < .01$ )。楽しいにおける想起の構えの単純主効果が有意であった ( $F(2,76) = 4.21, p < .05$ )。誇りにおける想起の構えの単純主効果が有意であった ( $F(2,76) = 6.54, p < .01$ )。嫌悪における想起の構えの単純主効果が有意傾向であった ( $F(2,76) = 2.68, p < .1$ )。それぞれ *LSD* 法による多重比較を行ったところ、自己高揚条件が印象条件と教訓条件より、うれしいと楽しいと誇りが強いことが明らかにされた。つまり自己高揚を促す過去の記憶は、ポジティブなものであり、ネガティブエピソードは想起されにくいという結果が示された。このことから、人は意識的に過去のネガティブエピソードを思い出して、今の自分は幸せだと自己高揚するような間接的な方略をとらない可能性が示された。また印象的なエピソードは、ポジティブ感情が比較的高い自己高揚条件と比べると、嫌悪感が強いことが明らかにされた。以上の結果から、本研究では自己高揚

や教訓のために、過去のネガティブエピソードを想起するという可能性は否定された。

次にエピソードが生じた時期の客観的遠さと主観的遠さの分析を行った。エピソードの客観的遠さ (何年前か) について、想起時の構え (印象条件、自己高揚条件、教訓条件) と再想起の成否 (再想起、忘却) の2要因分散分析を行なったところ、再想起の成否の主効果が有意であり、再想起されたエピソードが忘却されたエピソードより客観的に遠いことが示された ( $F(1,76) = 5.10, p < .05$ )。また交互作用が有意傾向であったため ( $F(2,76) = 2.87, p < .1$ )、単純主効果を求めた。その結果、教訓条件において再想起されたエピソードは、忘却されたエピソードより客観的に遠いことが示された ( $F(1,76) = 8.61, p < .01$ )。したがって、繰り返しの思い出される教訓的エピソードは客観的に遠いエピソードである可能性が示唆された。

次にエピソードの主観的遠さ (最近: 0 ~ 遠い昔: 9) において、想起時の構え (印象条件、自己高揚条件、教訓条件) と再想起の成否 (再想起、忘却) の2要因分散分析を行なったところ、交互作用が有意であった ( $F(2,76) = 3.60, p < .05$ )。単純主効果を求めたところ、自己高揚条件では再想起されたエピソードは忘却されたエピソードより主観的に近いという有意傾向があることが示された ( $F(1,76) = 3.32, p < .1$ )。反対に教訓条件は、再想起されたエピソードは忘却されたエピソードより主観的に遠い有意傾向が示された ( $F(1,76) = 2.97, p < .1$ )。以上から、再想起される教訓的エピソードは主観的に遠く感じられる有意傾向のあるエピソードであり、客観的には有意に遠いことが示された。教訓的エピソードは、印象的エピソードや自己高揚的エピソードと比べて少ないため、エピソードの検索が過去に遡るのかもしれない。

次に感情の強さと現在からのエピソードの距離 (遠さ) の関係について検討した。印象条件において、感情の強さと現在からのエピソードの距離の相関を求めたのが Table 2 である。

Table2 再想起したエピソードの感情の強さと現在からの距離の相関関係 (印象条件)

現在からの遠さ	うれしい	楽しい	誇り	驚いた	恥ずかしい	悲しい	恐怖	嫌悪	怒り
客観的距離	-0.30 **	-0.25 *	-0.19	0.13	-0.03	0.15	0.14	0.13	0.09
主観的距離	-0.22 *	-0.21 *	-0.25 *	0.26 **	0.08	0.27 **	0.32 **	0.42 **	0.35 **

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table3 再想起したエピソードの感情の強さと現在からの距離の相関関係（自己高揚条件）

現在からの遠さ	うれしい	楽しい	誇り	驚いた	恥ずかしい	悲しい	恐怖	嫌悪	怒り
客観的距離	-0.14	-0.35 **	-0.30 **	-0.21	-0.21 *	-0.10	-0.03	-0.27 **	-0.30 **
主観的距離	-0.20	-0.25 **	-0.35 **	0.00	0.09	0.17	-0.08	-0.34 **	-0.35 **

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

Table4 再想起したエピソードの感情の強さと現在からの距離の相関関係（教訓条件）

現在からの遠さ	うれしい	楽しい	誇り	驚いた	恥ずかしい	悲しい	恐怖	嫌悪	怒り
客観的距離	-0.15	0.05	0.11	-0.06	0.02	-0.03	0.12	0.02	-0.02
主観的距離	-0.32 **	-0.08	0.16	0.03	0.00	0.10	-0.03	-0.15	-0.10

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

結果から、客観的に現在に近いエピソードほど、うれしい、楽しいの感情が有意に強いことが明らかになった。また主観的に現在に近いエピソードほど、うれしい、楽しい、誇りの感情が有意に強いことが明らかにされた。反対に現在から遠いエピソードほど、驚いた、悲しい、恐怖、嫌悪、怒りの感情が強いことが示された。これらの結果は、Ross & Wilson (2002) に類似している。つまり Ross & Wilson (2002) の高校最終学年からの主観的距離だけでなく、本研究のように人生全体を想起させた場合にも、現在からエピソードの主観的距離と感情の関係は、ポジティブエピソードを現在に近く感じ、ネガティブエピソードを現在から遠く感じることを示された。本研究の結果は、神谷 (1997) のこれまでの人生（昔）でネガティブ記憶が再想起されやすいこととも類似しており、神谷 (1997) を間接的に支持したといえる。

さらに自己高揚条件において、感情の強さと現在からの距離の相関を求めた (Table 3)。その結果、客観的にも主観的にも現在に近いエピソードほど、楽しい、誇り、嫌悪、怒りの感情が強いことが示された。また恥ずかしいの感情は、客観的に現在に近いエピソードほど強いことが明らかになった。この結果は Ross & Wilson (2002) の結果とは異なり、自己高揚を促すエピソードを意図的に想起させた場合、現在から遠いエピソードほどネガティブ感情が強く、最近のエピソードほどポジティブ感情が強いことは示されなかった。

次に教訓条件において、感情の強さと現在からの距離の相関を求めた (Table 4)。結果から、エピソードの客観的距離と感情の強さには相関がなかった。主観的に現在に近いエピソード程、うれし

い感情が強いことが示された。これらの結果から、教訓を促すエピソードを意図的に想起させた場合、現在から遠いエピソード程ネガティブ感情が強いという結果は示されなかった。Bluck (2003) は、過去のネガティブな失敗経験は自分を成功に導き、失敗を繰り返さない機能をもつと述べているが、本研究の結果からは、教訓的エピソードを意図的に想起させた場合に、過去のネガティブエピソードは想起されず、Bluck (2003) を支持しなかった。

以上の結果から、本研究で実施した自己高揚条件では、Ross & Wilson (2002) で生じたような、現在から遠いエピソードほどネガティブ感情が強く、最近のエピソードほどポジティブ感情が強いという想起はなされなかった。さらに本研究の教訓条件においても、現在から遠いほどネガティブなエピソードが想起されるという結果は得られず、過去のネガティブな失敗経験は自分を成功に導き、失敗を繰り返さない機能をもつという Bluck (2003) の説を支持しなかった。したがって、我々は自己高揚や教訓のために、意図的に現在から主観的に遠いネガティブエピソードを想起する方略は取らない可能性が示された。

しかしながら、本研究で得られた知見は、自己高揚を促すエピソードと教訓を促すエピソードの意図的な想起過程に限定されている。ところで北村 (2008, 2004a) は、感情と反応の生成についての統合的なモデルを作成している。この SAC モデル (situated strategies of automatic and controlled processing model) では、感情の情報的意味の処理に統制のプロセスと自動のプロセスを仮定している。そして状況や課題の性質によって、統制方略と

自動的方略が引き起こされるとしている。本研究では、教示によって、自己高揚を促すエピソードと教訓を促すエピソードの意図的・統制的な処理を中心に扱った。しかし現実場面では、むしろエピソードの無意識的・自動的な想起過程がより優勢に生じている可能性があり、無意識的・自動的な想起過程では、Ross & Wilson (2002) や Bluck (2003) の説を支持する結果が生じる可能性が残されている。この点については今後検討すべきである。

今後の課題には上述の無意識的・自動的な想起過程での検討の他に、以下の3つが考えられる。1つはエピソードの自由記述の扱いである。本研究では、実験参加者のプライバシーへの配慮から、エピソードの自由記述の分析は行っていない。しかし実験参加者が3種の教示によって、印象的エピソードや自己高揚的エピソードや教訓的エピソードを想起した確証を得るためには、自由記述の内容を確認すべきであった。また自伝的記憶における感情の役割をより深く検討するためには、今後は自由記述の内容も含めて検討していく必要がある。

2つめは、自伝的記憶の性差の検討である。先行研究では自伝的記憶における性差が数多く検討されている。例えば、感情的な自伝的記憶は男性より女性の方が詳細な情報を記録しやすく、想起しやすいことが明らかにされている (Seidlitz & Diener, 1998)。さらに自伝的記憶を使用した自己調整機能にも性差があることが確認されている。例えば Pasupathi (2003) は、一般に他者に過去のネガティブ経験を語る場合に、ポジティブ気分を高めネガティブ気分を低減する効果があるが、特に女性より男性でこの傾向が顕著であるとしている。本研究ではサンプリングの問題から女子大学生と女子短大生のみを対象とした。しかし今後は、自伝的記憶の性差の影響も考慮して検討する必要がある。

3つめは、想起するエピソード領域の影響の検討である。岡田 (2008) は、女子学生の日常における感情経験と自律的な動機づけとの関連を検討している。岡田 (2008) は研究2において、感情を経験した出来事を学習領域と友人領域の2つに分けて、自律的な動機づけを調べた。結果から、学習領域ではポジティブな感情の経験が動機づけを高め、友人領域ではネガティブな感情の経験が動機

づけを低めることが示された。この結果は、以下のように解釈された。学習場面ではネガティブ感情は一般的であるため、ポジティブ感情が経験された場合のインパクトが高く、それが動機づけを高めることに影響する。反対に、友人関係場面ではネガティブ感情が稀であるためインパクトが強く、動機づけを弱めることに影響する。本研究では、想起するエピソードは限定しなかったが、学習領域に限定してエピソードを想起させた場合と、友人領域に限定してエピソードを想起させた場合とでは、ポジティブ感情とネガティブ感情のインパクトは異なっていた可能性がある。したがって、今後は想起するエピソードの領域も検討すべきである。

## 謝 辞

ご指導とご助言を頂きました大阪教育大学名誉教授北尾倫彦先生に深く感謝いたします。また、格別のご支援を頂いた元四條畷学園短期大学教授近藤淑子先生に厚くお礼を申し上げます。

## 引用文献

- Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, **11**, 113-123.
- Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory. In D. C. Rubin (Ed.) *Autobiographical Memory*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Conway, M. A. (1991). *Autobiographical memory: An introduction*, Milton Keynes; Philadelphia: Open University Press.
- Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books.
- 神谷俊次 (1997). 自伝的記憶の感情特性と再想起可能性 アカデミア (南山大学紀要) 自然科学・保健体育編, **6**, 1-11. (Kamiya, S.)
- 北村英哉 (2008) 感情研究の最新理論—社会的認知の観点から— 感情心理学研究, **16**, 156-166. (Kitamura, H. (2008). Research on affect today: From the perspective of social cognition. *The Japanese Journal of Research on Emotions*, **16**, 156-166.)
- 北村英哉 (2004a). 認知と感情 大島尚・北村英哉 (編) 認知の社会心理学 北樹出版, Pp.108-130.
- 岡田 涼 (2008). 女子学生の日常における感情経験と自律的な動機づけとの関連—領域による差異の検討

- 感情心理学研究, **15**, 1-12.  
(Okada, R. (2008). Emotional experience and autonomous motivation: Examination of variance in domains. *The Japanese Journal of Research on Emotions*, **15**, 1-12.)
- Pasupathi, M. (2003). Emotion regulation during social remembering: Differences between emotions elicited during an event and emotions elicited when talking about it. *Memory*, **11**, 151-163.
- Pillemer, D. B. (2003). Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the specific episode. *Memory*, **11**, 193-202.
- Ross, M., & Wilson, A. E. (2002). It feels like yesterday: Self-Esteem, valence of personal past experiences, and judgments of subjective distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 792-803.
- 榊美知子 (2005). 感情制御を促進する自伝的記憶の性質  
心理学研究, **76**, 169-175.  
(Sakaki, M. (2005). Nature of autobiographical memory that facilitates improvement of negative moods, *The Japanese Journal of Psychology*, **76**, 169-175.)
- Seidlitz, L., & Diener, E. (1998). Sex differences in the recall of affective experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 262-271.
- Smith, S. M., & Petty, R. E. (1995). Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1092-1107.
- Tulving, E. (1972). Episodic and semantic memory. In E. Tulving & W. Donaldson (Eds.) *Organization of memory*, 382-403, New York: Academic Press.

—2009. 1. 15 受稿、2009. 1. 18 受理—